◆【海員随想】ＢＩＳＫＲＡ号航海記（12）③　元機関長　新木繁雄

4 月 27 日（金）アビレス停泊

昨夜は少し飲み過ぎたようだ。10 時に武村君に起こされた。彼もかなりの二日酔いらしく「頭がガンガンする」と言っている。

使い残りのペセタ（スペインの通貨）をドルに替えようと銀行へ行ったが、ドルをペセタには替えるけれど、ペセタをドルには替えてくれない。同じ銀行でドルを替えてもらったレシートを見せたが「駄目だ」という。出港してしまえば紙くず同然だ。何かを買って使ってしまうしかない。武村君は、娘さんの土産にフラメンコ人形を買った。

午後、機関長も連れて魚の買い出しに行った。アジ、ニジマス、イカ、それに野菜を少し買った。残りの金 1500 ペセタ分買うつもりだったが、重くて持てないので、1000 ペセタでやめた。冷蔵庫にはアルジェで釣ったタイがまだ 60 匹ほど残っている。結構料理できそうだ。

この港は、ものすごく干満の差が大きい。5、6 メートルはあるようだ。市場へ出かけた時は、船の方が岸壁より低かったのに、帰ってきたら、ずーっと上になっていて、荷物を持ってタラップを上がるのが大変だった。

夕食用に買ってきたイカの胴に、もち米を詰めて炊いた。少し米が多かったらしく、イカがはちきれそうに膨らんだが、もち米にイカの味がしみ込んで、すごくうまいのができた。機関長は大喜びで、3 匹も食べた。

4 月 28 日（土）アビレス停泊

午後、アンカーの修理落成書ができてきて、船長室でサインした。一部控えをもらい、コピーして造船所へ送った。18 万 5570 ペセタ。日本円にして約 60 万円。同じ修理をイタリアでやった姉妹船のビシャー号では、日本円で 400 万円だったそうだ。イタリアは何でもべらぼうに高い。特に日本人にはふっかけるようだ。

夕方町をぶらつき、靴を一足買った。1 万 1860 円。少し高いが、紙屑同然になってしまう金だから、何でもよい。店員の話では、スペインで最高のブランドだそうだ。夕食はビーフステーキ。日本では「わらじのような」と表現するほど分厚いステーキだ。肉とワインで満腹してしまった。焼き飯を作ったのだけど、誰も手をつけず。機関長が「夜食に食べる」といって持っていった。

機関長の依頼で、日本までの燃料を計算して、彼の計算と合わせてみたら、ほとんど同じだったので、安心して請求書を出したようだ。

船長の話では、明日 6 時に離岸して、錨地でラッシング（積み荷が動かないように縛ること）し、月曜日の午後、出帆になるといっていた。